くまもと文学・歴史館報
5周年
くまもと文学歴史館

くまもと文学・歴史館5周年

服部英雄（くまもと文学・歴史館長）

三十一年の歴史があった熊本近代文学館がリニューアル再編され、くまもと文学・歴史館としてスタートしてから、一月二十八日で五周年を迎えました。展示対象が近代文学から全時代の文学、また歴史分野全般に拡充されました。背景には熊本県に歴史研究全般を担う機関・博物館が少ないこと、熊本県立図書館が所蔵する膨大な歴史資料の紹介が不十分で、展示作業を通じて県民に共有してもらいたいという意識がありました。展示対象の拡大にともなって、文化財に指定された歴史資料や文学資料の展示が可能になるように、設備が更新されました。展示は企画展（他施設収蔵品も併せ展示、原則年三回）と「アーカイブズに見るくまもと」（自館収蔵品の展示、これまで十六回）を両輪として年平均六回開催してきました。企画展では県立図書館所蔵の文庫資料を中心とした展示をほぼ毎年実施しています。

開館展示は「文学と歴史でたどるくまもとの記憶」、つづく予定だった春の絵図展は熊本地震のために中止、平成二十八年度夏は「永遠の乙女達へ少女雑誌とふろく展」、秋は「来熊一二〇年　漱石と熊本―秋はふみ吾に天下の志―」、冬に「上妻文庫展」を開催。上妻文庫の大正昭和の古写真は失われた熊本の原風景を回想させました。

上妻写真の一点に、昭和初期・津奈木千代の薩摩街道両側の七本松の写真があって、山仕事から戻ってきた少年少女が写っており、地元区長大渕満夫氏らのご尽力でそのうち三人がご健在と判明、七十年ぶりに彼女たちが同じ現場に集合、テレビ放送されました。

個人的には五高時代の漱石が端艇部々長であった時に起きたとされていた事件を調べ、それが粉飾であることを明らかにできました。文学・歴史のコラボの一環のつもりです。

続く二十九年度は「震災の記憶と復興エール」「少年雑誌に見る時代のヒーローたち」「顕光院・益姫　江津湖を愛した奥方」「一枝の筆」に託して徳冨蘆花生誕一五〇年」。

震災展では震災を体験する中での文学作品、『震災万葉集』を募集展示し、さらに公刊できました。地震という歴史的事件を文学作品で記録に残すことができ、朝日新聞（天声人語）をはじめ、多数の新聞各紙やテレビ番組でも取り上げられました。過日、投稿者のお一人が来館、家は倒壊、母親は施設に、自分もステージ4のがん患者。『震災万葉集』から生きる力を得られたといわれました。

続く三十年度は「貸本漫画の遺産」「蒙古襲来絵詞と竹崎季長」「武士の教科書―永青文庫寄託漢籍資料から―」。絵詞展では肥後御家人竹崎季長が残した世界の至宝を展示できました。多くの来館者を迎えることができ、地元の海東郷（宇城市）からも熱い声援をいただきました。間近に見る絵から、何が描かれているのか、自由に議論する中で、発見が相次ぎ、館員も楽しい時間帯を過ごすことができました。

令和元年度は「梶尾真治の世界」「祈りの島　天草とその海」「山崎文庫展　医学・歴史・蒐集に情熱を傾けた山崎正董」。

令和二年度は「「新青年」創刊一〇〇年　編集長・乾信一郎と横溝正史」、「絵図が語るくまもと」、「海と空のあいだに―石牟礼道子の文学世界―」。この五年、リニューアルの課題に応え、県民に親しまれ、期待される施設に近づいたと自負します。これからもご支援をよろしくお願いいたします。

服部英雄（はっとり・ひでお）
一九四九年名古屋市生まれ。九州大学名誉教授。東京大学大学院修了後、文化庁文化財調査官（史跡担当）。一九九四年より九州大学で教鞭を執る。二〇一六年四月より現職（阿蘇世界遺産学術委員会委員長ほか）。

第6号
目　次

巻頭言　服部英雄（くまもと文学・歴史館長）……1頁
企画展・関連講演会報告……2頁～6頁
収蔵品展・共同展示・マンガコーナー報告……7頁
友の会事業報告・「新型コロナウイルス感染拡大への対応」・「くまもと文学・歴史館開館五周年」……8頁

企画展報告――

「新青年」創刊一〇〇年 編集長・乾信一郎と横溝正史

期間　令和２年７月17日～９月22日
会場　展示室１

二〇二〇年に創刊百年を迎えた雑誌「新青年」は、国内外の探偵小説を紹介した大正・昭和モダニズムの代表雑誌である。江戸川乱歩や横溝正史をはじめとする多くの探偵小説作家を生み出し、日本の探偵小説を大きく発展させた。その編集長であった横溝正史と、同じく編集長を務め、没後二十年を迎えた熊本の作家・乾信一郎についての展示会を開催した。

第一部「乾信一郎の世界」では、ユーモア、翻訳、ラジオと様々なジャンルでの活躍を紹介した。九州学院時代の体験を描いたユーモア小説「敬天寮の君子たち」を、原稿とともに展示した。翻訳小説でデビューした「新青年」の雑誌資料や、連載した「阿呆宮一千一夜譚」の自筆原稿等を展示した。「新青年」編集時代の思い出を描いた「新青年の頃」の原稿では、横溝正史との出会いの場面を取り上げた。『アガサ・クリスティ自伝』をはじめとした翻訳作家としての活躍を紹介した。動物作家としては、「小さな庭のウォッチング」の原稿を展示するとともに、乾が撮影した自宅庭の動植物の写真をパネルにして紹介した。ＮＨＫ連続ラジオドラマ「青いノート」、「コロの物語」などの作品を執筆し、放送作家として活躍した様子を、自筆原稿や、乾が撮影した当時のスタジオ録音の風景写真とともに紹介した。

第二部「「新青年」と作家たち」では、「新青年」の概要を示すと共に、乾と交流のあった「新青年」作家を書簡と共に紹介した。江戸川乱歩、海野十三、小栗虫太郎、獅子文六、城昌幸、伊馬春部について、「新青年」の掲載誌と書簡を展示した。日本のＳＦ作家の先駆けである海野十三の書簡では、戦後の電力供給がままならない時期に、既に充電式の電灯を使用していた様子が伺え、科学技術者でもあった側面が見られた。劇作家・ユーモア作家の獅子文六は疎開地・愛媛からの書簡で、初めての田舎暮らしの中、毎日釣りやスケッチを楽しんでいる様子が書かれていた。伊馬春部の書簡からは、恩師である折口信夫や柳田国男との交流や、ラジオ放送作家として慌ただしい生活をしている様子が伺えた。

第三部「横溝正史との交流」では、名探偵・金田一耕助を生んだ横溝の戦後の活躍を紹介するとともに、岡山に疎開していた頃に横溝が乾宛に書いた書簡を中心に展示を行った。書簡では乾が横溝に捕物帳を執筆することを依頼し、それがきっかけで自分の新しい境地が開け、生活にも余裕ができたと、乾に感謝する内容が書かれていたものを紹介した。

この展示会に向けての資料調査中に、横溝正史の乾宛書簡二百四十通が新たに発見された。このことは新聞で紹介され、全国ニュースとなった。翌年、没後四十年を迎える横溝正史の展示会を開催することを予告するとともに、この書簡を封筒のまま展示した。

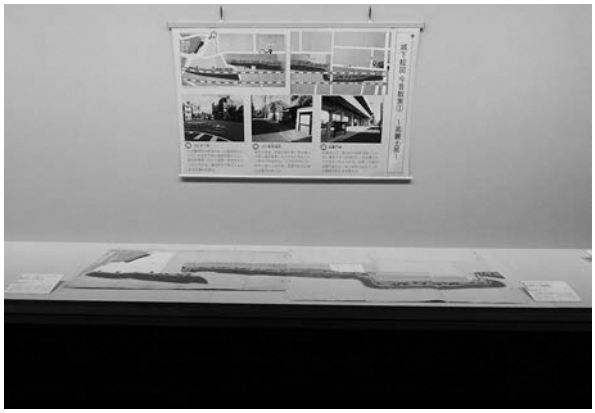
展示ケース内の様々な場所に、乾がコレクションした百点を越える世界の猫グッズを点在させ、会場を彩った。会期を前期、後期に分け、書簡を入れ替えて展示した。

関連企画として展示室３に、『金田一少年の事件簿』、『名探偵コナン』などの推理マンガ読み放題コーナーを設置した。夏休み中ということもあり、マンガを読んでいる若者の姿も見られた。

絵図が語るくまもと
―熊本県立図書館　絵図コレクションから―

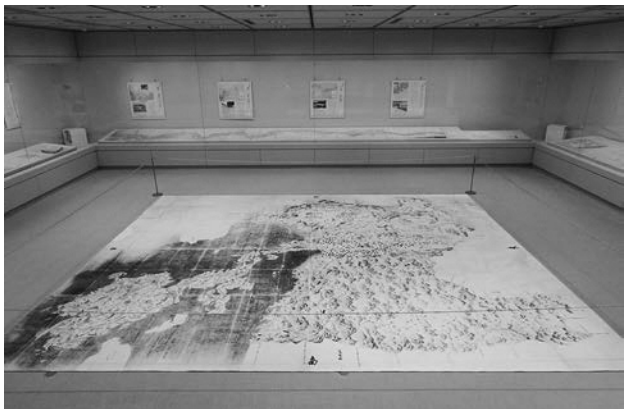
期間　令和２年10月８日～11月30日
会場　展示室１・２

熊本県立図書館は、旧藩から熊本県が受け継いだ江戸時代の絵図や、明治政府の指示により県庁が作成した郡村図など、多数の絵図・地図を所蔵している。絵図・古地図のデータはデジタル化され、展示室２の収蔵資料デジタルコレクションや、インターネット上でも公開されている。企画展「絵図展―描かれたくまもと―」は、平成二十八年（二〇一六年）四月に開催予定であったが、熊本地震のため中止となり、今回は「絵図が語るくまもと―熊本県立図書館　絵図コレクションから―」と題し、当館にとって満を持しての開催となった。多数の絵図・地図の中から三十二点を展示した。また、壁パネルは、絵図のデータ上に現在の地図を重ねて、土地利用の変化や絵図の精確さが分かるように作製した。熊本県立図書館情報支援課とも連携を図り、館内職員への説明会を実施し、図書館閲覧室に企画展関連の書籍コーナーを設けた。



第一章「絵図を作る」では、御土居の絵図や手永図を展示し、算術などの素養をもとに技術を磨いた測量家たちが、肥後領内の姿を克明に記録したことを紹介した。第二章「熊本藩の都市計画」では、「二ノ丸之絵図」「古町之絵図」など城下絵図を取り上げ、熊本城下の形成・発展を紹介した。第三章「絵図に描かれた防災遺産」では、全長約三十メートルに及ぶ日本最大級の川絵図「菊池川全図」の一部（玉名平野を中心）を展示した。石刎や堰など巧みな技術による治水・利水施設が描かれ、地域の暮らしを守り困難に立ち向かった先人の苦労や努力を伺うことができる。第四章「近代熊本都市成長の記録」では、明治時代以降に作成された地図を取り上げ、西南戦争により焼失した熊本城下町一帯が、〝軍都〟として復興し発展する様子を紹介した。

当館で作製した複製絵図を活用し、展示室２の床面に「肥後国中之絵図」（複製）を、壁面に「熊本市街全図」（拡大複製）を展示した。来館者の絵図に対する興味関心は高く、絵図を前に熱心に見る姿が多くあった。



企画展関連行事として、十一月八日に服部英雄（くまもと文学・歴史館長）による講演会「絵図の楽しさ」を開催した。館長は、企画展の絵図調査にも立ち会い、研究者としての観点から絵図に描かれた対象物に着目した。講演会でも、高麗門土居、豊後街道、菊池川全図などを映写しながら、絵図の見方を丁寧に解説し、三十二名の参加者も興味深く聴いていた。十月十日・十一月二十一日に当館職員によるギャラリートークを開催した。

企画展関連講演会〈令和２年11月８日／熊本県立図書館大研修室〉

絵図が語るくまもと
―熊本県立図書館　絵図コレクションから―

講師：くまもと文学・歴史館長　服部　英雄

熊本県立図書館所蔵の熊本藩絵図は、その注記によれば元々は「御前絵図」、つまり藩主が閲覧する熊本藩にとって最枢要の絵図でした。明治になって県に引き継がれたもので、価値の高いものです。今日は、企画展「絵図が語るくまもと」に展示中の絵図によって、三つのテーマでお話します。最初のテーマは豊後街道です。

熊本城内の図にあるように、新一丁目御門前の「札の辻」が起点です。ここから小倉に向かう豊前街道、鶴崎に向かう豊後街道、長六橋を通り薩摩街道、日向街道と四方に行く街道があります。人の往来が多く、名の通り高札場です。豊前街道と豊後街道は城内の二の丸、新堀櫓横を通り京町に出て、その北の追分で分かれます。

細川韶邦（たくくに）が初めて肥後国に国入りしたときの絵図に立田口の立町構井口にあった「須戸」が描かれています。隙間の多い、竹や木を格子に組んだ門で、他にも城下との境には多くの「須戸口（押口）」が描かれています。

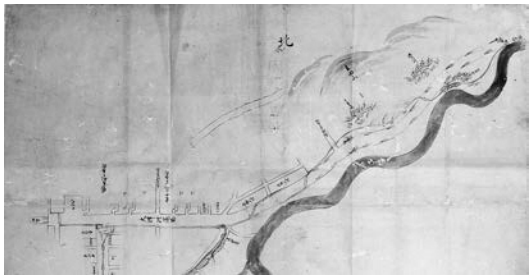


図１　水道の図（部分）

「水道の図」（図１）は「水道町」の名の由来となった水道を描いています。水道は白川の上流から引き、子飼、千反畑、広丁を経て現水道町交差点から厩橋の際まで流れていました。子飼町の現在商店街の所には開渠（かいきょ）があり、道との交差点には石を置いて蓋をし、橋にしていました。豊後街道（大津往還）の「泰勝寺（細川家菩提寺）馬場」あたりに大きく描かれた一対の木は一里木（遠くからでも一里の目印になる木）です。上妻文庫（県立図書館所蔵）に大正・昭和の一里木の写真があります。日の丸や塩と書かれた看板のあるお店があって、一里を歩いてきた多くの人が休憩しました。馬や馬車・大八車、その車輪も見え、疲れた馬を、新しい馬に交換したのではないかと推定できます。

杉並木街道については、現在もＪＲ三里木駅一帯に立派な並木があります。『肥の後州名所名物数望（すもう）附』に「熊本より大津まで五里の間、並木の大杉両側に続き、最も大往還なり、並木より並木までの広さ、又大路の広き事、天下の大街道たりども此街道に及ぶ所なし。日本第一の大往還歟（か）」と書かれています。現在の日光杉並木に匹敵するくらいの壮観な杉並木街道があったようです。古い絵図には先の立町構井口から杉並木が始まるとしたものもあります（明暦元・一六五五年～寛文二・一六六二年）。当初はそのあたりにはまだ人家がありませんでした。熊本の城下、はずれから始まった杉並木が、城下の拡大につれて歯抜けになって、後退していく様子が、いくつかの絵図を比較するとわかります。

次のテーマは菊池川絵図です。この川絵図は全体が約三十メートルもあり、担当した宮村改助などが多くの日数をかけて毎日測り、安政二年（一八五五年）ごろに作成しました。川は曲がっているから、一枚の絵図の中に入るわけがないのですが、絵師たちは川の特色もわかるように工夫して方角を変え、それを図示しながら、川幅、目印、施設、川の形態、それから用水受益地と、必要な情報をすべて書き込んで図化しています。上流から紹介します。

菊池川の水源周辺には「雑木繁立」と書かれていますが、落葉樹をたくさん植えてある水源涵養林だと思います。下ると途中に滝があり、幅と高さを間数で示しています。「鍋倉橋」という上流の橋は、川の中の岩などを利用して竹を束ねて渡し、洪水のときには流れても、またかけ直す簡易な橋でした。

下流に行くと「菊池堰」があります。菊池の赤星という所の堰でここから用水を引いています。ロックフィルのように石を積んでいるので、船の通行が非常に難しくなるでしょうね。安政の頃にはこうした固定の堰になっています。また、「下分田仮橋」には横に「舟渡し」「舟頭小屋」とも書いてあります。仮橋なので、舟頭がいて舟でも渡していました。さらに下ると、最重要の交通路である豊前街道に架かる橋があります。こちらの橋はさっきのものに比べると橋桁が高い。背の高い舟が通って橋桁を上げたのでしょうか。

次に白石堰です。菊池川は有明海の干満の影響を受け水位が上下しますが、この堰から上には塩水は来ません。少し下ると急に曲がっている所があります。川は浸食するので、攻撃地点にはいっぱい刎を設け、反対側は逆に土砂がたまり、河原になります。河原の中を掘り込んだ水路があり、上流に樋門があり水が通って橋も架けられています（図２）。「十左衛門（じゅうざえもん）ぼり」という用水で、取り入れ口を村境を越えたずっと上流に求めています。当時は大野牟田溝といっており、秋丸村用水だとあります。菊池川は真水ですが、満潮のときには塩水が逆流するから、その時

間帯の川の水は農業用水としては使えません。塩水は薄くとも稲には毒。経験則で満ちてきたら水は取り入れません。取入口を上流にすればするほど、長い時間取水でき、多量の水が得られます。可能な限り上流まで用水路を上げていました。そのすぐ下流は高瀬町、ついで河口です。描かれた建造物には「遠見」とあり、夜に船で通る人たちが灯台にしたのではないかと思います。

流末の一夜開は文政六年（一八二三年）、鯨油開は天保二年（一八三一年）に干拓されます。鯨油開は他の干拓地とは異なって海と同じ色に塗られています。この地図ができたのは安政二年、鯨油開ができて二十年近くになりますが、まだまだ干拓地は安定していなくて、時々海になることもあったようです。

最後のテーマは熊本城下です。城下の絵図の凡例によれば、下屋敷や、知行取、中小姓、切米取の屋敷が色分けされています。知行取と中小姓までは名字が書いてありますが、切米取になると「右同」とかで固有名詞もなかったり、名はあっても名字がなかったりと、かなりの階級差があります。

まずは高麗門周辺の絵図です。高麗門のあたりは、今は新幹線が通っていますが、昭和の初めまで堀があり『肥集録』に「高麗門外左右湛堀」と書いてあります。石垣の高さが二間五尺、幅が四間半、御番所があり、三間と三間半で鍵の手になっています。「有明灯」があり、多分夜も人がおり、今の交番のような役割をして、門の管理もしていたわけです。

図2　菊池川絵図（部分）

高麗門の外側に「御掃除方御用屋敷」とあります。御掃除方は堀をさらったり川の掃除をしたりする役をしていたらしく、一年間に一貫目を町方から御掃除方に渡していたようです。町牢がそこにありました。

今の高麗門より段山の方に行った所にさきほどみた須戸口が描いてあります。すぐ隣はものすごく立派な高麗門なのに、ここはいつでも徒党を組んで押しかければ壊せるような門です。この須戸口は石塘口や下河原口、長六口にもあり、あとから紹介する絵図に出てきます。新三丁目門は高麗門と同じように番所があり枡形になっています。熊本医学校の教師だったマンスフェルトが撮影した写真があり、じつに立派な門だったことがわかります。

今度は高田原の絵図です。今の市電の通りがあり、厩があった所が現在の市役所で、いまも厩橋の名があります。厩の馬を御花畑の南、追廻馬場に連れていき訓練していたようです。

次に古町の絵図（図3）です。六十間（百八メートル）四方という特異な区画整理がされています。中心にお寺があることが特色です。よく「一町一寺」といわれますが、寺は参道が面した通りの町名になり、一街区は周り四つの町の中にあるので、「一町一寺」というのは正確ではないように考えます。城下は街区で町名を決めているのではなく、面する通りの両側で、同じ町名になります。毎朝「おはようございます」という人が同じ町内、背中はめったに顔を合わさないのでほかの町内になります。普通は長方形の町割にするところですが、ここはなかに寺院を配置するということで正方形の町割になりました。

図3　古町の絵図

それから薩摩街道・長六橋が架かっています。須戸が描いてあり、この須戸を越えて下河原に下ります。この河原は何も書かれておらず、河原印の紫色が塗られているだけです。実は長六橋対岸迎町から下河原を撮った明治初期の写真があります。長六橋よりは簡素な橋が下手にあります。河原の住民がかけた橋です。何もないわけでは決してなくて、芝居小屋があって、下座や上座の大きな三角屋根が写っています。触れ太鼓をうつ櫓があり、芝居小屋がかかるときには触れ太鼓で熊本市中の老若男女が「何右衛門が来るぞ」とかいって、みなが着飾って見物に行ったと思います。熊本で最高級の商店街に隣接して、またべつの繁華地区がありました。芝居の世界は当時、別世界（物貰いの世界）として見られており、絵図はそうした世界を描きませんでした。

下河原には全部で三つの須戸がありました。そのうち一つは手前に十王堂があって、十王は閻魔の横にいて、冥界を司ります。下河原には刑場があり、火炙りの記録もあります。須戸はこの世とあの世を隔ててもいました。市中引き回しののち、その先に今もある団子地蔵で、家族が最後の見送りをしたとされています。

絵図はいろいろな情報をもたらしてくれるけれど、絵図に描かれない情報もあります。絵図は一面の世界しか知らせてくれないこともあります。芝居は芸能文化の出発点であるけれど、藩が作成した絵図は、何も記さず、明治初期の写真に残されました。そういう熊本の歴史もありました。

ご清聴ありがとうございました。

海と空のあいだに
―石牟礼道子の文学世界―

期間　令和３年１月21日～３月８日
会場　展示室１

二月十日に没後三年となる作家、石牟礼道子が残した、初期から晩年までの直筆資料を紹介する展示会を開催した。

第一章「原風景―若き日の作品を中心に―」では、現在最も初期の作品とされている小説「不知火」や結婚前に詠んだ歌を美しい字で編んだ「未完歌集　虹のくに」を展示。淡い恋心を抱きながらもその想いを封じ込め理想の世界を夢見る乙女の姿を文章や短歌で表している。また、原稿「タデ子の記」は、戦災孤児の「タデ子」を連れて帰り五十日程ともに暮らした時のことを書いた。戦争で犠牲になった弱き子どもたちに心を寄せた作品で、代用教員錬成所での恩師、徳永康起がその原稿を長年保管していたもの。その後、教師を退職して結婚、母となり、子供を想う歌など、短歌に自分の想いを託し新聞や歌誌に投稿。短歌で頭角を現したころの新聞やノートを紹介、更に詩人谷川雁や女性史研究家高群逸枝夫妻との出会いを通して生まれた作品も展示した。

第二章「海と空のあいだに―苦海浄土の世界―」では、水俣病の患者との出会いによって生まれた『苦海浄土』を中心に紹介。渡辺京二氏が編輯する「熊本風土記」に「海と空のあいだに」というタイトルで連載され、加筆して改題出版された作品が『苦海浄土―わが水俣病―』である。石牟礼はその後も患者と行動を共にし、第二部第三部と数十年にわたって書き継いだ。このコーナーでは、水俣で使用していた文机や『苦海浄土』の直筆原稿、初めての絵本『みなまた 海のこえ』の校正原稿などを展示した。

第三章「小説世界―自筆原稿からみえるもの―」では、『苦海浄土』以外の主な小説八作品について年代順に紹介。百歳以上の古老達から西南役のころの話を聞き、無文字の世界に生きる人々の生き方から近代を浮かび上がらせた著書『西南役伝説』や、書き直しを繰り返す様子が分かる自伝的小説『椿の海の記』の校正原稿を展示。更に天草・島原一揆をテーマとして書いた最後の長編小説『春の城』。この作品は昭和四十六年（一九七一年）水俣病患者と共に、チッソ東京本社に座り込みをしたとき、原城にたて籠った名もなき人々の身の上がしきりに心に泛び、書きたいと思っていたもの。取材旅行や聞き取りなどを繰り返し、平成十年（一九九八年）に三百十二回、新聞に連載。作品につながる取材ノートも展示した。

終章「新作能―文学の無限の可能性を求めて―」では、晩年創作した、新作能を紹介。死者たちへの鎮魂の思いを込めて書かれた新作能「不知火」は水俣で奉納公演された。また、新作能「沖宮」は染色家の志村ふくみ氏との出会いの中で生まれた。晩年の校正原稿やノートを展示した。

全体を通して、短歌、詩、俳句、小説、新作能と様々なジャンルの文学に挑戦した石牟礼道子の貴重な直筆資料を見てもらう機会となった。

展示室３のマンガコーナーでは企画展に合わせて「自然・環境・社会」関係マンガを設置、自然や釣りをテーマにしたマンガが人気を得た。

関連行事として、三月六日、日本近代史家の渡辺京二氏による講演会（演題「残夢童女」）を開催。半世紀以上執筆活動を支えた最大の理解者の話に、彼女の作品の魅力を深く知る機会となり、好評を博した。また、三月四日に当館職員によるギャラリートークを開催した。

収蔵品展 アーカイブズシリーズ

アーカイブズに見るくまもと15

◆肥後のブランド
安永蕗子の短歌を味わう

令和2年5月14日～7月5日

●肥後のブランド

それぞれの地域の名所や名産品は、地域をイメージさせる顔、つまり〝ブランド〟のようなもの。遠くの人も惹きつけ、また地域に住む人々の誇りの源泉でもある。歴史分野は、「肥後のブランド」をテーマとした。肥後の名所や名産品のランキングとして江戸後期に作成された「肥の後州名所名物数望附」や藩主の領内把握のための備忘録であった「肥州録」などを展示し、

肥の後州名所名物数望附

当時の人々の肥後米や八代蜜柑などブランドに対する認識がどのようなものであったのかを紹介した。

●安永蕗子の短歌を味わう

大正九年（一九二〇年）に生まれ、生誕百年の節目を迎えた熊本市生まれの歌人・安永蕗子の作品を、書家としても活躍した蕗子の流麗な自筆資料により紹介した。

熊本歌壇を牽引した父 安永信一郎の影響のもと、幼少期から文学に親しんだ蕗子。戦争や肺結核との闘病生活を生き抜き、自然や生命の深淵を格調高く歌い上げた。その生涯に発表された数多くの短歌から、代表的なものを展示。また、長く住んでいた江津湖畔の風景が詠まれた作品を紹介した。

アーカイブズに見るくまもと16

◆くまもと教育の夜明け
球磨の〝鮎〟の遊び

令和2年12月23日～令和3年1月10日
令和3年3月19日～5月5日

●くまもと教育の夜明け

江戸時代後期から明治初頭に至る、熊本の教育活動を記録した資料を展示した。地域の教育に尽力した木下初太郎が遺した資料、学校設立の活動を記録した県庁文書、当時使用された手習本・教科書を紹介した。「熊本県管内学校位置図」には小学校・英学校・私立学校の位置・校名が示され、熊本県内に近代教育を普及させようとしたことが分かる。

●球磨の〝鮎〟の遊び

人吉出身の俳人 上村占魚の雅号は名高い球磨川の「鮎」から付けられた。芸術を志し、熊本での学業を終えると東京美術学校へ進学。かたわら後藤是山、松本たかし、高浜虚子らに句作を学ぶ。のち俳句に専念し俳誌「みそさざい」を主宰。早くに熊本を離れたが、故郷と球磨焼酎への愛は生涯変わらなかったという。この夏豪雨により被災した球磨川流域へのエールともなることを願い、酒と旅を愛した望郷の俳人占魚の生涯と作品を特集した。

共同展示 3・11文学館からのメッセージ

◆震災の記憶と復興エール

令和2年5月14日～7月5日

全国文学館協議会の呼びかけによる共同展示「3・11文学館からのメッセージ」は、平成二十三年（二〇一一年）の東日本大震災を契機に、死者に対する鎮魂と被災者への慰謝を願うという趣意に賛同した全国の文学館で開催。当館では、熊本地震に際して、全国の文学関係者から寄せられたメッセージの一部を展示。

マンガコーナー

令和元年度（二〇一九年度）より、展示室3にマンガコーナーを設置。企画展、収蔵品展のテーマに合わせて、約二百五十冊のマンガを手にとって読めるように置き、二ヶ月程度で入替を行っている。資料はNPO法人熊本マンガミュージアムプロジェクトより提供。

今年度は、新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点から、当初、マンガの設置をとりやめ、七月からとなった。「新青年」の企画展に合わせ、『名探偵コナン』などの推理マンガ。十月からは、絵図の企画展に合わせて、地図・旅をテーマにしたマンガを設置。一月からは、石牟礼道子展に合わせて自然・環境・社会マンガを設置。釣りを題材に芦北の自然を描く話題作『放課後ていぼう日誌』などを置いた。

友の会事業

◆**定例事業**

○**月案内発行**　くまもと文学・歴史館の行事等を会員へ送付。

○**文章勉強会**　毎月一回開催。有志による文章講座。

○**歴史勉強会**　毎月一回開催。有志による古文書講座。

◆**湧水第二十八号発行**

会員の作品を集めた文芸誌「湧水」を年一回発行。

◆**今年度の主な事業**

四月に熊本地震朗読会、五月に友の会総会及び記念講演会、春と秋に文学・歴史探訪、年に数回の友の会会員を講師としての湧水講演会などを予定していたが、新型コロナウイルス感染拡大のため、全て中止となった。

新型コロナウイルス感染拡大への対応

新型コロナウイルス感染防止のため、二月二十八日から五月十三日まで休館を余儀なくされた。三月二十日から開催予定であった収蔵品展は、再開後の五月十四日からに延期、関連行事も軒並み中止となった。また県境を越えた移動制限等のため一部資料の借用も困難となり、企画展の内容も収蔵品を中心としたものに変更した。館の再開後は、入館者の検温やヘルスチェック、接触感染回避のための消毒なども継続して実施している。なお、この間、館職員は在宅勤務が導入される中で、基礎データの再整理の取り組みや、ツイッターでの情報発信を強化し、展示予定の館蔵資料の紹介や、百年前のスペイン風邪の熊本における蔓延の状況の情報発信を行うなど、コロナ禍のもとでの新たな試みを模索する一年でもあった。

くまもと文学・歴史館開館五周年

くまもと文学・歴史館は令和三年(二〇二一年)一月二十八日で開館から五周年を迎えた。これを記念し、先着百名の来館者に記念品を配布した。五周年の記念ロゴマークを考案し、令和三年中は記念展示会の開催も予定している。「くまもとの記憶」を未来につなげるため、一層の精進をしていきたい。

くまもと文学・歴史館のご案内

所在地
熊本市中央区出水２丁目５番１号
(熊本県立図書館併設)
電話（０９６）３８４―５０００㈹

開館時間
午前９時30分～午後５時00分

休館日
火曜日・毎月最終金曜日
年末年始・特別整理期間

入場料
無料

最寄りの交通機関
(1)市電＝「市立体育館前」下車・徒歩５分
(2)バス＝「水前寺公園・県立図書館入口」下車・徒歩５分

文学・歴史館友の会会員募集中

この会は文学や歴史に関心のある人々の自主的な集まりです。

くまもと文学・歴史館を核として、文学・歴史愛好者の大きな輪を作りたいと願って組織するものです。

詳しくはくまもと文学・歴史館受付へお問い合せ下さい。

くまもと文学・歴史館報
第６号
令和３年(2021年)
３月31日発行
編集
発行　くまもと文学・歴史館
〒862-8612
熊本市中央区
出水2丁目5番1号
電話096-384-5000㈹
FAX096-385-4214